

時津町は「家読」を推進しています

たまには テレビをけして

こがくねんむ 2024年 春号



「チクタク村はおおさわぎ」

イザベッラ・パーリャ/文 フランチェスカ・アイエッロ/絵
石井 睦美/訳 (BL出版)

チクタク村は、おんどりが冬眠する村。だから村の人はいくつも時計をもって、せかせかと毎日忙しそう。でも、公園ですごすりりーたちだけは、本を読んだり、捨て犬や草花のお世話をしてゆっくりした時間を過ごしていた。

ところが、大人が村をほったらかしにしていたあいだに、いろんなものがきえてなくなっていった。

うちどく 家読とは

家族みんなで好きな本を読んで、読んだ本について話す。これが「うちどく（家読）」

です。
難しいルールは要りません。

家族みんなでルールを決めてはじめてみましょう。

家族で同じ本を読みあったり、おとうさんやおかあさんに読み聞かせをしたりと楽しい時間を過ごしましょう。



「モノの名まえ事典」

そんな理由!! アレにもコレにも!!
杉村 喜光/文 大崎 メグミ/絵 (ポプラ社)

モノには名前がついているけど、それぞれその名前になった理由があるんだって。

動画が配信している「YouTube」。この名前になった理由をきみは知っているかな? ほかにも、食べ物やものの名前やみんながよく使う言葉の語源などがわかります!

クイズ形式なので、家族や友達と一緒に盛り上がりあっちゃおう♪



「ひとりかもしれない」

岩瀬 成子/作 (フレーベル館)

最近、お母さんが再婚をして新しいお父さんと三人暮らしになった。おまけに、広めのアパートに引っ越すから転校しないといけないみたい。自分の気持ちを素直に伝えることができない私は、新しい家族にも馴染めなかった。

私もクラスメイトの世里ちゃんみたいに、はきはきと自分の意見が言えたらいいのになあ。



「風に乗ってきたメアリー・ポピンズ」

P. L. トラヴァース/著 (岩波書店)

桜町通り十七番地のバンクスさんの家に、風変りな女の子の人がやってきた。東風の吹く日に、こうもり傘につかまって、空から!

つんとすましたその人の名前は、メアリー・ポピンズ。バンクス家の4人の子どものお世話をするのがお仕事なんだけど、毎日がわくわくでいっぱい。不思議な磁石で世界中を旅したり、星の女の子と買い物をしたり。

メアリーと一緒に、毎日あきることなどありません!



「長い長い夜」

ルリ/作・絵 カン・バンファ/訳 (小学館)

「ぼくには名前がない。でも、ぼくは自分だれなのか知っている。」

そんな文章で始まるこのお話は、不思議な出会いと別れの物語です。

地球上で最後の一頭になったシロサイが小さなペンギンに伝えたかったこととは…。どんなにつらく長い夜でも、決して希望をすててはいけなと思えるお話です。



「ひぐれのラッパ」

安房 直子 /作 MICAIO/画 (福音館書店)

春のひぐれに、とうふ屋さんが金のらっぱをふきならしながら自転車をはしらせていると、はい色の着物を着た子どもたちに「とうふやさん、ラッパを聞かせてください」とおねがいられます。とうふ屋さんが出会った子どもたちは実は…。表題作の「ひぐれのラッパ」他6作。少し怖くて、切なくて、そして温かくなる短編集。

ときつちょうりつときつとしょかん
発行：時津町立時津図書館